

校長室だより

共学共高

第
73
号

令和6年11月18日発行

発行責任者
白梅学園高等学校長
武内 彰

ケアンズ修学旅行～part 1

11月4日（月）～8日（金）の日程で、第2学年生徒たちは、修学旅行に参加した。私は過去2年間、沖縄修学旅行の引率であったが、今年はオーストラリア・ケアンズの引率となった。58名の生徒が参加し、数年ぶりに再開した海外修学旅行の様子をお届けしたい。

11月4日（月）夕方、成田空港第3ターミナル2階出発ロビーに参加生徒全員が集合した。全員私服での参加であるため、顔と名前的一致している生徒はすぐにわかるが、普段制服を着用している姿にすっかり慣れてしまっている私は、本校の生徒なのかどうか迷う場面もあった。見送りに来てくださった保護者や御家族の方々にお別れをして、搭乗手続きへと進む。みんな元気そうで何よりだ。



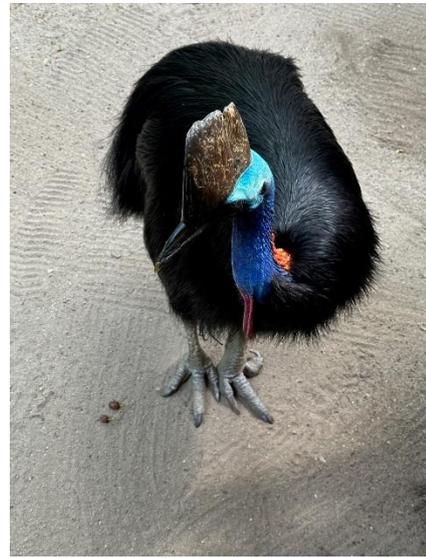
いつものことだが、飛行機が離陸するときには生徒たちの歓声が聞こえる。はじめて飛行機を利用する生徒もいるようだ。ケアンズまで7時間弱のフライトであるが、睡眠をとることを優先している様子だ。ここで寝ておかないと翌日の行程が厳しいので、私も寝ようとするが、3時間くらい眠れたかなという程度であった。

現地時間で午前4時15分、ケアンズ国際空港に着陸した。専用バスに乗り込んで、ケアンズ市内へ向かう。目的地はハートリーズであるが、時間調整のため早朝から営業しているスーパーマーケットで買い物体験をする。生徒たちは飲み物などさまざまに必要なものを購入していた。私も、ミネラルウォーターとちょっとしたお菓子を手に取り、セルフレジに挑戦した。何とか自力で買い物をすることができ、安堵する。再びバスに乗車し、ハートリーズへと向かう。



バスの車窓からケアンズ市内の街並みを楽しみながら、50分くらいで、ハートリーズ・クロコダイル・アドベンチャーズに到着。機内食は簡単なものであったため、こちらで朝食をいただく。生徒たちもしっかりと食事を摂っている。その後、2隻に分かれて乗船し、クロコダイル・クルーズである。どこにクロコダイルがいるのか水面上では分かりにくいですが、陸で休んでいるクロコダイルは見つけやすい。途中で、船員がクロコダイルの名前を呼ぶと、船に近づいてきて、餌に飛びつく様子を見ることができる。生徒たちからは「おおー」という声が上がっている。今は繁殖期でクロコダイルたちも、なかなかデリケートな状況にあるようだ。

下船後には、園内の様々な動物たちを見て回る。コアラやカンガルー、ワラビーといったオーストラリアならではの動物や爬虫類、鳥類など、さまざまに楽しむことができる。カンガルーは放し飼いになっていて、その背中を撫でる生徒も複数いる。途中で「校長先生、コアラはどこですか」と尋ねられたので、「あそこにいたよ。帰り道に寄ってみたら」とアドバイス。そう言いながら、その後一人で園内を歩き回っていたら、迷いそうになってしまった。来た道に戻って売店にたどり着き、その後専用バスへと乗り込んだ。



一度、3泊するホテルに向かい、スーツケースを預ける。その後、みんなで徒歩にてフォガーティ・パークへと向かう。ケアンズでは、横断歩道を渡るためには支柱に設置されたボ

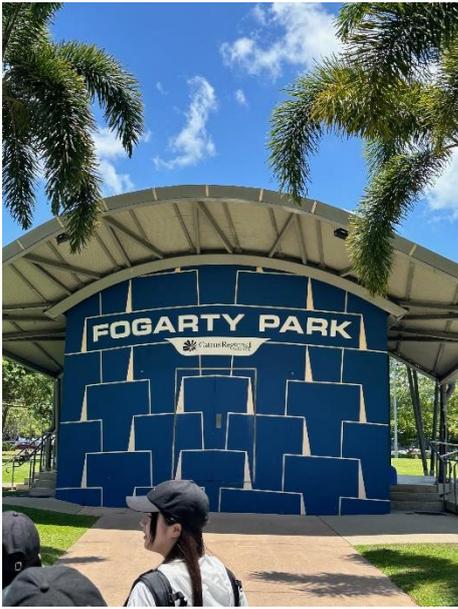
タンを押す必要がある。青信号になって渡るのだが、日本と比べて圧倒的に時間が短い。したがって、駆け足で渡らなくてはならない。「歩行者に優しくない信号だな」と私がつぶやくと、近くにいた生徒が笑っていた。パークでは、現地の大学生と「ブラザー&シスター・プログラム」を行う。班ごとに自己紹介をして（もちろん、英語である）、それぞれの班がパークから離れていった。ここでは、現地の大学生と共に、市内観光をしたり、食事をしたりしながら、与えられたミッションに挑戦するのである。上位3チームには賞品もあるという。現地スタッフのリーダーと思しき女性とあいさつを交わす。「オーストラリアは初めてか？」と聞かれたので、「30年以上前にハネムーンで訪れた」と答えると、「奥さんを連れてこなくてはだめではないか」と言われてしまった。

生徒たちが再集合するまでの間に、昼食のためにウォーターフロントにあるシーフードレストランへ行く計画を立てていたのだが、朝食をしっかり摂ったせいか、お腹がいっぱいでとても食べられる状態ではない。しかし、一度お目当てのレストランを見ておこうと歩いて行ったところ、何とお休みであった。ちょっとした散歩となったが、多くのヨットが停泊して雰囲気の良い場所である。またの機会を楽しみにするでしょう。

生徒たちが続々と班ごとにパークへ戻ってきた。最終ミッションは、「ベジマイト」というオーストラリア独特の調味料(?)を塗った食パンを食べるというものだ。「美味しい」という生徒もいれば、そうではない反応をする生徒もいる。私はいい味だと思ったので、最終日におみやげとして購入した。参加している生徒たちは意欲的で、積極的に大学生とコミュニケーションをとっている。普段の英語の授業では、大きな声で発話している姿をあまり見ることがないので、私には新鮮であった。このように、世界の人々と意思疎通をしながら、共に仕事をする日が遠くない将来に訪れるはずだ。今の学びを大切に、ね。



夕食は、ウォーターフロントにあるレストランでステーキをいただく。引率教員を含めて60名以上が入れるとは、大きなレストランだ。海を見ながら、料理を楽しんだ。生徒たちも楽しそうに歓談しながら、ほぼ完食していた。途中でサプライズがあり、店員さんが総出でお祝いしてくれたが、詳細は次年度のために明かさないのでおこう。予約が難しい人気店で素敵な時間を過ごすことができた。今夜はベッドでゆっくりと休んでほしいものだ。(続く)



(共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す）